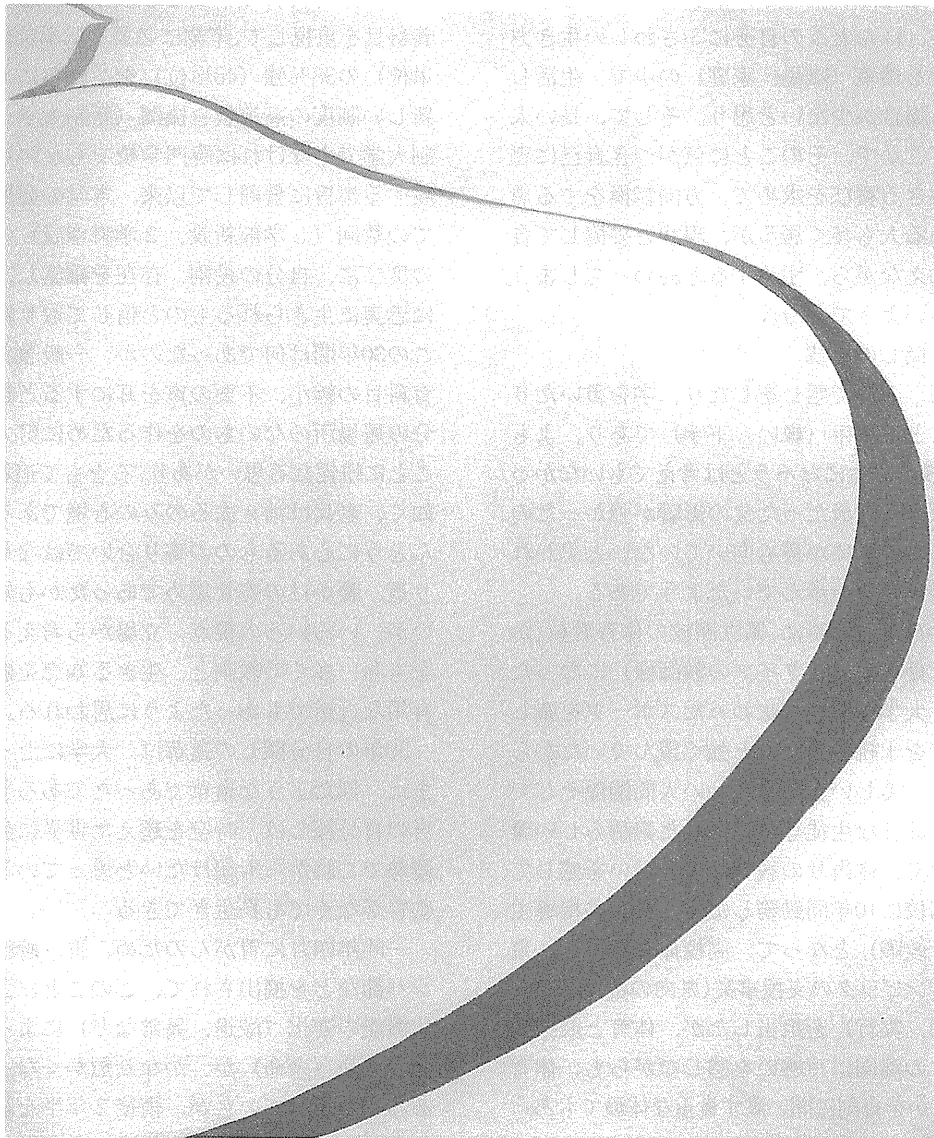




ジョージア・オキーフ：「冬の道」

ほんとうに生きる難しさ

立 崎 栄 一

人間は誰でも最初から何らかの目的をもって自分の意志で生まれたわけではない。自分で選んだつもり職業や生き方も、多分に、他人の意見やアドバイスが影響しているものであり、ほんとうの自分にふさわしい生き方のできる環境（職場、家庭）の中で、生活している場合が少ないと思う。そして、長い人生のどこかで、そのことに気がつき自己に忠実に生きる喜びを求めて、方向転換をする勇氣のある人も多く居るが、現状と妥協して自己を抑えながら、ずるずると終わってしまう人も多いようである。

◎自分探しの道草

生来、人前で話しをしたり、字を書いたりすることが苦手（嫌い、下手）であり、よもや、学校の先生になろうとは考えてもいなかったのだが、教員だった父の影響が強かったのか、いつのまにか最も向いていないと思われる教職への道を歩んでいたようである。

大学卒業と同時に、県立高校の体育教員（かつては最も嫌いなタイプの教師像）になったのは、大学で初めて味わったスポーツを楽しむ喜びを永続させたいと強く望んでいたからである。美しい自然や暖かい人間関係そして素直で純朴な生徒等に囲まれた素晴らしい環境の中で、体当りの教育に生きがいを感じて、同一高校に10年間勤務した後、県教委指導主事（行政職）となって、高校体育指導と、東京オリンピックの支援事業（県内の聖火リレーの企画、実行）を担当したが、体育と競技スポーツの混同に戸惑いを感じながらも、体育とは何かを真剣に問い直す貴重な体験でもあった。

獣医畜産学部の新設申請に必要な教員の一人として、本学の教員となり、2年後の教養部開設時に相模原に移住してから、すでに、28

年を経過したが、この間の生活には、ほんとうの自分として生きた実感はなく、長い道草であったように思う。

保健体育科目4単位を必修とし、その他教養科目を重視して、卒業に必要な総単位数（124単位）の38%強（48単位）をこれらに充てた新しい制度の高等教育機関（新制大学……旧制大学でもなければ専門学校でもない）を創設する趣旨に賛同して以来、本学の発展としての数回（5学部新設、2学科増設）の申請のたびに、自分の役割、存在を確認し、自分に忠実に生きられるものと信じて取り組んだこの30年間は何であったのか、一般教育や体育科目の縮小、不要の声を耳にすると、自分の居場所のないものを作るために努力したことに忸怩たる思いがあり、石をもて追わるゝ如く、老兵は消え去るのみの心境である。ほんとうに心あるものの寄り合いではなく、寄り道、腰かけの寄せ集めであったかも知れないが、いろいろの視点、立場から考える機会をもち、多くの教訓と、生きる知恵を感じた有用な近道でもあったように思われる。

30年の自分探しの道草は、大学にとってもまた、似たような道草であったであろう。本当の自分探しは、時空を超えた世界に生きる姿勢でこれからも続けたいと思っている。

◎胃がなくても長生きできる

一昨年四月に胃がんのため、胃、脾臓、リンパ節などを摘出されて、このことによる生体機能の変化（減退、異常など）によって自分の寿命（余命）が、かなり短くなったであろうと思っていたが、術後2年半を経過した現在では、いろいろな後遺症などに悩まされながらも、その日の健康の度合いを確認し、生きている今を大事に過ごして、余命を生き伸ばすことを心がけ、現状を長期間維持する

ことが可能であるとの希望の実感から、「胃がなくても長生きできる」ような気がしている。

「がんと闘うな」論を中心に、がん治療のあり方から医療問題に至るまで、賑やかな昨今であるが、検診や手術の技術向上により、これら診断や摘出手術に関わるトラブルも減少しているようであり、自分は、早期発見と適切な手術によって、救われたと信じている一人である。しかし、胃なしの特殊人間にとっては、術後生活をよりよく生きる為の適切な指導が必要であり、後遺症などの対策や食事などの生活の改善向上に関するアドバイスが、最も重要なことであると思う。こんど、本学東病院に開設される癌治療研究部門の研究課題の一つとして、真剣に取り組んで欲しいと願うものである。

昨年暮れに、自分の試行錯誤的術後対策の効果を検証したいと考えて、全摘出手術による胃なし人間約150名を対象に実施したアンケート（男90、女48名から回答）の結果では、術後の経過と共に、それぞれ自分流の生き伸び方を工夫して、自分だけの生活（前向き、プラス思考、達観、趣味拡大、食事、運動など）を模索実行し、再発、転移の不安と向き合いながら、健康を強く意識した生活をしている人が多くなっている。そして、自分の寿命が、術前と変わらないと思っている人が、男子38.9%、女子31.2%もいるうえ、むしろ寿命が伸びたと思っている人が、男子14.4%、女子10.4%であって、男子の53%、女子41%が、胃がなくても長生きできるとしていることが判明しおどろきであった。

まことに嬉しく、心強い限りであって、これからは、「胃がなくても長生きできる」から「胃がなかったら長生きできる」という新説を唱え、実証したいと大胆にも考えているこの頃である。

（体育）

与波比保之

看護学部4年 熊谷 亜希子

「al-nashirah(アル・ナシラ)」。黄道十二星座は山羊座のγ星の名前である。意味は「喜びの訪れ」（他に「アナウンサー」もある）。我々が雑誌で見かける星占いの星座から、それも含めた全天の八十八星座、古い星図に描かれ今は用いられていないものまで、星座を形づくる星々には名前を持つものが多い。

日本の随筆文学として知られる『枕草子』にも星のことが書かれている。「星はすばる、牽牛（ひこぼし）、ゆふずつ。よばひ星、少しをかし。尾だになからましかば、まいて。」プレアデス星団、わし座のアルタイル、夕刻の金星のことである。「よばひ星」とは流れ星であると考えられている。最後の「尾だに～」とは、尾さえなかったらもっと（面白いのに）という意味で、流星痕が見られるほど立派な流れ星を清少納言は見ていたことになる（平安の女性が大胆に星を仰いだりできたのかは怪しいけれど。）

流れ星は、江戸時代の『和漢三才図絵』でも「与波比保之」（よはひほし）と記されている。中国の『史記』では、「流星で音のあるのは天狗星、音のないのは狂夫星」というように、他にも細かに分類されている。また「日本記」では音のする流れ星を天狗（アマツキツネ）と記している。

さて、与波比保之の由来であるが、もとは中国の伝承によるところで、『日本の星』では「流星の飛ぶや、蕩子の女家に就ぐが如きあり、故に与波比保之と名づくるなり」とある。流星が飛ぶのは品行の悪い男性が女性の家に行くのに似ているから、夜這い星というのだそう。今日、流れ星を見たら消えるまでに3回願い事を言うと叫ぶ（実際にはほとんどムリ）と言うが、昔の伝承から見ると、とんでもないことだと言えるだろう。

アテネの初夏

小 野 健 一

復活祭の休暇に念願のギリシアへ行くことを思い立ち、パドア大学の藤田文章君に無理をお願いして、彼と一緒に車でユーゴスラヴィア経由で行くことになった。今から30年も前の話、私がイタリアにいた頃の話である。アテネから来ている大学院学生のゲオルガス・クリストス君にも帰省を兼ねて案内役に同行して頂いた。クリストス君のお父上は建築家で、クレタ島の地震のとき、彼の建てた家は一軒も倒れなかったというのが自慢である。アテネの市内に大きなアパルトマンを持つ他に、アテネから20キロほど離れた郊外の高級住宅地(残念ながら町の名は忘れた)に立派なお宅を持っている。

聖金曜日のキリストの葬礼のプレセッションを、アテネの市内は混むから、あちらの家で見ましようと言って下さって、お父上の郊外のお宅に招かれた。プレセッションは日が落ちてから行われる蠟燭の行列で、先頭にお坊さんの一団、その後にキリストの遺体を象徴する塩を乗せた輿、最後に飴色の細い長い蠟燭を持つ町の人たち殆ど総出の行列が続く。行列は町を一巡して教会の前まで来ると、輿が教会の正面入り口の上に人の背丈ほどの高さに保持され、人々は十字を切ってその下を潜って教会の中に入り、そこでキリスト葬礼のミサが上がる。

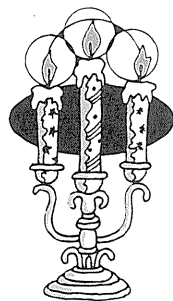
私たちも行列に加わった。歩きながら見回すと、お互いに雑談したり、子供たちが蠟燭を曲げたり結んだりして悪戯したり、結構リラックスしているのだが、全体としては肅々といった感じで進んで行く。お坊さんの唱えるぺらぺらぺらと同じ高さで続いて最後の音節が一音低くなる祈祷の、適当な切れ目ごとに、会衆がキリエ・エレーゾン、キリエ・エレーゾン、キリエ・エレーゾンという言葉

を、ドレミファ、ソファミレ、ドレドラーという4拍子のけだるいメロディーで2度繰り返す。

行列の中のお嬢さんたち数人のグループがクリストス君を見つけ、おや、イタリアへ留学している筈のクリストスがあんな所にいるわ、といった感じで、綺麗な声で「クリストース!」と呼びかける(イントネーションは、第一音節のクリスを高く、トで短三度下がって、トースとしり上がりにやや高くなる)。するとクリストス君が「いや、あれは小学校時代の友達で」などとへどもど言い訳をしながら彼女たちのところへ行き、しばらく雑談しながら一緒に歩き、やがて頭なんか掻きながらのそのそ戻ってくる。するとまた別の一団から「クリストース!」と声が掛かる。

砂地の松林のなかに点々と立派な邸宅が置かれている、ちょうど戦前の田無の自由学園の周囲を思わせる雰囲気町ののだが、行列はそこを静かに進む。アテネの初夏、心地よい宵の微風、松柏の香り、密蠟の燃える臭い、単調な祈祷の声、キリエ・エレーゾンの歌声、そして「クリストース!」。しのびやかな、嫋々として殆ど神秘的な、あの「クリストース!」が私には忘れられない。

(元教授 物理学)



情報検索のご案内

蔵書検索用の端末を1階閲覧室の円形テーブルに設置しました。現在この端末から検索できる資料は教養図書館の全資料の約30%です。内訳は平成7年4月以降に受入れた資料、自然科学系の全資料(NDC 400-499)、講義用・ゼミ用図書、平成7年4月から館外貸出された図書です。「蔵書検索(簡易検索)のすすめかた」を参考に求める図書を探してください。不明な点は図書館員にお尋ねください。

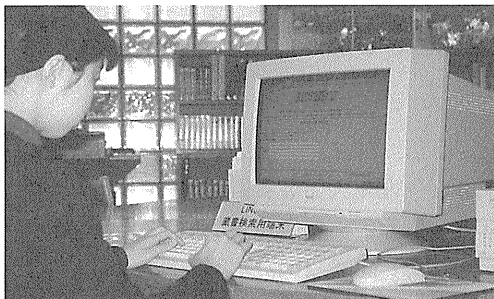
メインメニューバーのBookmarksをクリックすると医学図書館、衛生・理学部図書館、看護学部図書館の蔵書が検索できます。

CD-ROMの利用もこの端末で行います。現在よく利用されているのは、

1. 平凡社世界大百科事典
2. 理科年表 1996年版
3. The World Multimedia Encyclopedia. などです。最近、「CD Books 日本野鳥大鑑、鳴き声333」を受入れました。是非、試聴してください。

文献検索用のCD-ROMは従来通り、カウンター内のパソコンを使用してください。以下のタイトルを所蔵しています。

1. 雑誌記事索引(国立国会図書館編)1990-
2. 科学技術文献速報(日本科学技術情報センター編)
 - *環境公害編 1995-
 - *化学・化学工業編(国内編) 1995-
 - *物理・応用物理編 1995-
 - *電気工学編 1995-
3. 戦後50年朝日新聞見出しデータベース 1945-1995



冬休み中のお知らせ

冬期休暇中の貸出・閉館日等については、下記のとおりです。

- 1) 長期貸出 12月9日(月)～
'97年1月9日(木)
冊数制限は、ありません。
(但し、雑誌は対象外です。)
- 2) 開館時間 12月16日(月)～12月24日(火)
'97年1月6日(月)～1月7日(火)
平日 9時～17時
土曜日 9時～13時
'97年1月8日(水)～
平日 9時～19時
土曜日 9時～13時
- 3) 閉館 12月25日(水)～
'97年1月5日(日)

後期試験に備えて

- 1) 開館延長
'97年1月18日(土)は、午後3時まで開館します。どうぞご利用ください。
- 2) 研修室の開放
3階研修室を下記の期間開放します。
期間 '97年1月16日(木)～1月28日(火)
- 3) 一部図書の貸出期限変更等について
試験期になると、一部の図書に利用が集中しがちです。このため、予約の多いものに限り、禁帯出(館内閲覧のみ)、一日、二日、三日貸出等の措置をとることがありますのでご了承下さい。

北里大学図書館共通利用カードをまだ受け取っていない人へ

5月に交付しました北里大学図書館共通利用カードをまだ受け取りにきていない人がかなりいます。後期試験もうすぐです。早目に各図書館カウンターで受け取って下さい。

真白な平面に何気ない一筆書きのような黒い線が一本。リボンを波打たせて投げたかとも見えるその線はしかし、優美な曲線でありながらどうして只ならぬ勢と確な意志とを秘めていて、視る者をはたと立ち止まらせずにはおかない。

1986年に98歳で世を去ったジョージア・オキーフは、今世紀のアメリカ美術を代表する最も偉大な女流画家であった。ほぼ60年にわたる画業の間に夥しい作品を世に送り出したが、そのテーマは、自然の風物、都市の風景、花や樹木と、彼女の美的好奇心と追究心の赴くままに目覚ましく変化する。特に若い頃旅行して強く惹きつけられたニューメキシコの砂漠は生涯彼女を捉えて離さず、遂に彼女は活動の場であったニューヨークを離れて、ニューメキシコの砂漠の中の町アビキューに住みついた。アメリカの原風景かとも思われる荒々しい自然の真唯中で、原初の姿を留める山、風化した動物達の骨、太陽の申し子のような巨大な花などを彼女は描き続けて行く。恐らくこの世界のあらゆるものが彼女の旺盛な好奇心の対象であったのだが、わけても自然が造形するところの神秘的な生態構造に絶えざる関心を抱き続けたことは、彼女が砂漠のシンボルと呼ぶ動物の白骨化した頭蓋骨や骨盤のモチーフ、驚異的に拡大された花々の複雑きわまる花びらの重なり具合、女性の生殖器を想わせるような奥深い花芯の描写などに明らかに表れている。その一方でオキーフは、抽象的な線や形の組合せと色の配合による、いわゆるフォルム言語の構築の試みも決して怠らなかつた。最晩年の、「空の上の雲」とい

う宇宙的モチーフによる抽象画は、言葉では言い表せないものを伝えようとするこの絵画的言語追究の成果である。オキーフは早くから優れた独創性を示した天才的画家であったが、彼女がその長い生涯をかけて飽くことなく追究したものは、自然の風物という有機的テーマと、この形式主義的構図との理想的な組合せであった。「冬の道」はその努力の一つの結晶であると言えるだろう。

オキーフの作品を視ていて強く印象づけられることの一つに、実に女性的であるということがある。静物や花の絵はもちろん、一見女性的なものとは無縁な砂漠の白骨のモチーフでさえ、限りなく女性的な、殆ど女性そのもののフォルム化、色彩化であるかのような華やぎと神秘性を湛えていて、戦くほどの生命的感動を喚び起されるのだ。しかし晩年に描かれたこの「冬の道」は、男女の別を超えた人間そのものの在り方の、簡潔な力強い表現であるように思われてならない。一切の集約であるような一筋の道、意識の始源より発して延々と途切れることなく現在まで続き、生命のある限りどこまでも続いて行く……そしてその先はいつか永遠の中へ溶け入ってしまうであろう道。それはオキーフ自身の歩んだ道であり、まさしく彼女の言う「私が暮らした場所で私がやり遂げたこと」であるに相違ない。この「冬の道」は、ネイティヴ・アメリカの粗削りな風景と、一人の画家の逞しい精神との結びつきが生み出した、一個の美学的地形なのである。 (英語)

『イン・ザ・ウエスト：オキーフ画集』
(723.53/0 49)